

JAPIC NEWS

Contents

一般財団法人 日本医薬情報センター **JAPIC**
Japan Pharmaceutical Information Center

巻頭言

「医療ICTとMEDISの役割」

一般財団法人 医療情報システム開発センター(MEDIS) 理事長 山本 隆一… 2

トピックス

JAPIC AERS Forum 2014 開催報告 …………… 4

JAPICサービスの紹介

「平成25年度JAPIC Qサービスユーザ会」を開催しました…………… 5

医薬品情報ナビ…………… 6

コラム

最近の話題「血液製剤と血液法」

一般社団法人 日本血液製剤協会 理事長 宮本 誠二…………… 8

薬剤師の現場「奈良フェニックス大学の教壇に立つて」

一般社団法人 奈良県薬剤師会 理事 新居 徹…………… 10

くすりの散歩道「日本酒のEBM」

(一財)日本医薬情報センター 図書館部門 平山 陽菜…………… 12

インフォメーション

3月発刊!『JAPIC医療用医薬品集 普及新版2014』…………… 13

『日本の医薬品 構造式集2014』…………… 13

外国政府等の医薬品・医療機器等の安全性に関する規制措置情報より-(抜粋)…………… 14

■図書館だよりNo.285 ■情報提供一覧…………… 15

3

2014 | No.359

医療ICTとMEDISの役割

一般財団法人 医療情報システム開発センター (MEDIS) 理事長
山本 隆一 (Yamamoto Ryuichi)



医療ICT (Information and Communication Technology: 情報通信技術) は、医療をよりよくするためのものです。医療の新しい流れに沿ってICTが使われていくよう、MEDISが果たす役割について述べます。

銀行の現金支払機が登場したのが昭和44年、ATMは昭和52年にお目見えしています。

一方、わが国にX線CTが登場したのは昭和50年のことで、以後急速に普及しました。

また、ファクスの普及は昭和60年の電気通信法改正による公衆回線でのデータ通信解禁を待たねばなりません。同時にパソコン通信が始まって、電話回線を用いた情報交換が行われるようになり、平成6年にはインターネットの爆発的な普及が始まりました。

ハードウェアだけを見ても、昭和60年ころと現在では、CPU速度で10MHzが1GHzで100倍、メインメモリは64kbytesが2Gbytesで3万倍、ストレージは1Mbytesが100Gbytesで10万倍、通信速度は300bpsが10Mbpsで3万倍となっています。

医療機器に付属するコンピュータを別にして、医療機関で最初に活躍したコンピュータはレセプトコンピュータでしょう。医療機関がかかった医療費を保険者に請求するレセプトは、決められた点数表にしたがって診療行為を記載し、点数を積み上げていくもので、医療機関の中で行われている業務の中でコンピュータ化されるにもっともふさわしいものでした。医療のICT化の中で「義務化」にもっとも近かったのがレセプトであったのは当然でしょう。

レセプトオンライン化は電子化に一步トーンダウンしていますが、すでに医科では95%が電子化され、今後は審査の省力化やレセプトデータの分析が進んでいくことでしょう。

レセプトの次に電子化が進んでいったのは、検体検査です。血液等の検体こそ検査所に集めなければならないものの、検査成績は情報であり、公衆回線でやりとりするのにふさわしいものです。

さらに医療機関間で実用化が進められているものとして遠隔画像診断があり、これは医療機関で取られる画像も診断結果もデジタル化されているので、やりとりが電子的に行われます。

一方医療機関内でレセプトの次に電子化が進められていったのがオーダーリングシステム (オーダーリング) です。薬剤、検体検査、生体検査、画像診断、リハビリなど、医師から指示が出て別部門で実施される診療行為が多くあります。複写伝票で処理されていたものが、電子的に情報を伝えることによって指示が伝えられ、結果が戻されることによって、院内情報の事務処理の合理化が進みました。

現在は電子カルテが普及の過程にあります。電子カルテの目的は何と言っても情報の共有であり、とりわけ病棟では様々な情報源から取り込まれた情報や医師、看護師等によって書き込まれた情報などが直ちに参照可能になることにより、安全の確保、業務の効率化が図られます。

オーダーリングと電子カルテの距離は近そうに見えて遠いものです。何故ならオーダーリングの場合、カルテの正本

はあくまでも紙であり、コンピュータに残される情報はメモの意味合いしか持たないのに対して、電子カルテはコンピュータに残される情報が正本となるので、改ざん防止のための取り決めが必要となり、それは業務フローにまで影響を及ぼし、標準的な手順にしたがって業務が実施されなければならないことを意味するからです。

オーダーの代理入力や確定、取り消しなど、これまで紙を前提に行われた業務フローを電子的にどのように置き換えるかは、未だに十分標準化されているとは言い難く、もしくは医師に負担をかけるものになっていることがあり、今後もさらに検討していくことが必要です。

ソフトウェアのパッケージ化が進行しており、かつてのように病院ごとにそのフローに合わせてソフトウェアを組み上げていく時代ではなくなり、パッケージの都合に合わせて業務フローを変えていく時代にはなっています。

また、オーダーリングはソフトウェア的には電子カルテの機能の一部として実現されており、そのことは一見オーダーリングから電子カルテへの移行がスムーズに行く可能性を示しているようでいて、実際には先に述べたように原本性の問題が大きく立ちはだかっている、マンマシンインターフェースの面では別物と考えた方がスムーズです。

電子カルテの導入は、院内での情報の流通を容易にするだけでなく、医療機関間や医療機関と患者との間の情報交換を容易にする可能性を秘めています。

医療機関間の情報交換は、医療連携に必須です。急性期病院から療養型病院への転院、退院後のかかりつけ医との連携、セカンドオピニオンなど、医療機関の機能分化が進むにつれ、情報交換の必要性が高まります。

個人が生涯の医療記録を管理するPHRも現実のものとなりつつあります。個人で保管し、それをメディアに移して医療機関で参照するということがわずらわしいとなれば、それを他人に預けるということが考えられます。

このような医療記録の伝達には、セキュリティの確保が必須です。厚生労働省は「医療情報システムの安全管理に関するガイドライン」を出しており、現在では電子カルテの外部保存が可能になっております。

昭和49年に厚生労働省（当時厚生省）及び経済産業省（当時通商産業省）の認可を受けて設立された当財団は、その名が示すように国の研究開発費を用いて医療情報システム開発を行ってきました。主なものとして、ファクス、電子カードの利用、電子カルテシステムの開発などがありますが、日本医療情報学会や保健医療福祉情報

システム工業会が生まれ、開発はむしろそちらに重点が移っていること、また公益法人改革によって従来の研究開発費の受託配分といった業務が行いにくくなっていること、そもそも医療情報システムが開発期から普及期に移行していることから、財団の性格を変え、電子カルテを中心とした医療情報システムの普及の推進に向け、セキュリティ・プライバシーの確保、標準化の推進、システム導入にあたっての支援事業を展開しています。

このことは特にチーム医療の進展や地域医療連携、医療安全と深いつながりを持ちます。

医療の情報化を進めることによって、医療機関が良質な医療を効率的に提供することを支援し、受診者の福祉の向上、ひいては国民の安心に資することが本財団の果たすべき役割です。

システム提供としては、MEDIS-DCが自ら提供している部門システムとして、SaaS型ME機器管理システムMEDICSONと周産期電子カルテシステム、Web母子電子手帳をはじめとする健康手帳システムがあります。

サービス提供としては、医療情報システムのプライバシー保護に関連して、JIS15001への適合性を審査するプライバシーマーク付与認定制度（本財団はプライバシーマークの認定を受けている）と、セキュリティに関しては「医療情報システムの安全管理に関するガイドライン」への適合性を審査するPREMISs制度を提供しています。また、同じくセキュリティ関連の事業として、公開鍵基盤を用いて電子署名を行うHPKIや医薬品副作用報告の際の本人認証を行うMedicertified電子証明書発行事業を運用しています。

コンテンツ提供としては、医療情報システムで用いる用語コードの標準化を長く実施してきており、その成果として、標準病名、看護用語、検査、医薬品、医療機器などのマスターを提供するとともに、患者情報伝達のフォーマットとしてのJ-MIX、一般名処方やジェネリック医薬品の提供に役立つMedQを提供しています。また、医薬品の添付文書情報を電子化したJAMESもDI（医薬品情報）の道具として有用です。

医療現場の情報化と情報の利活用が本格化する中、当財団としては、ご紹介したこれまでの事業を中心として、真に我が国の社会保障を支える意味ある情報化の推進のため今後も最大限の努力をしまいたいと思っています。

■ JAPIC AERS Forum 2014 開催報告

「JAPIC AERS Forum 2014」を去る2014年2月7日（金）長井記念館1F会議室で開催いたしました。

製薬企業を中心に59名の方々にご参加いただき、アンケートでは全般的に良かったと好評価をいただきました。以下、アンケートからご意見を抜粋いたします。

1. 今回のForumの内容について

ア.全般的に見て

- ・製薬メーカーの目線で話をしてくださった
- ・JADERの活用のヒントとなった
- ・大規模データベースの活用意義がわかったので良かった

イ.講演内容

- ・統計学的な知識はないが、不均衡分析での仕組みが理解できた
- ・難しい内容だったが、とても勉強となった。また参加したい
- ・立場の違う視点からの意見を聞くことができてよかった

2. 今後のJAPIC AERS Forumについて

- ・データベースの活用方法について、さらに聞きたい
- ・シグナル解析の方法や解析後の手順について
- ・RMP追加安全対策の検証についての具体例など

アンケートにご記入いただきましたご意見は、今後のJAPIC AERSサービスや次回Forum企画の参考にさせていただきます。ありがとうございました。

<当日のプログラム>

基調講演「医薬品安全対策の新たな幕開けを迎えて」

北里大学薬学部 成川 衛 様

「医薬品副作用データベースを用いた発癌リスクの解析」

東京大学医科学研究所 湯地 晃一郎 様

「FAERSおよびJADERデータの特性とその利用法について」

一般財団法人日本医薬情報センター 日野村 靖

「RMP、PBRERとシグナル評価」

中外製薬株式会社 安全性データマネジメント部 青木 事成 様

■ 「平成25年度JAPIC Qサービスユーザ会」を開催しました

平成25年度Qサービスユーザ会を平成26年1月24日（金）大阪ブリーゼプラザ（大阪）、1月29日（水）長井記念館会議室（東京）で開催いたしました。大阪22名、東京30名の方がご出席くださいました。

前半は「Qサービス平成26年4月からの変更点」など、後半はJAPICの「海外文献学会情報の提供」について、最後に個別相談をお受けいたしました。

前半Qサービス平成26年4月からの変更点などでは提供実績としてJAPIC構築データベース（PhaDoMs）作成作業の流れや収録情報についての説明をし、平成26年度からの変更点としてキーワードの追加・変更（①現在の安全性⇒平成26年度より有害事象、自殺企図、毒性等、その他、②18歳未満⇒18歳以下）により医薬品名以外のキーワードが18種類から21種類になる事と「副作用」、「有害事象」の付与基準についてキーワード付与例を提示し説明を致しました。その後に「よくあるご質問」としてご契約の種類、「平成25年12月2日付薬食安発1202第2号通知」、「有効性欠如」について説明をいたしました。また、採択誌について、定期的に採択誌としての妥当性について検討している事をご案内し来年度から追加する雑誌についても紹介いたしました。

後半は「JAPIC海外文献学会情報の提供」として3つのサービス「トムソン・ロイターとの提携による海外文献学会カスタマイズ情報」、「外部データベースを利用した文献検索サービス」、「JAPIC-Q 海外情報サービス」について説明し、最後にそれぞれの特徴をご理解いただきご利用いただけるように、3つのサービスの比較について解説いたしました。

アンケートでは来年度からの変更点についてユーザーニーズに合った変更であるとのこと意見が殆どでありました。今後頂いたご意見に真摯に向き合っておりますので、いつでもご要望などお寄せ下さいますようお願い申し上げます。

Qサービスユーザで当日の資料をご希望の方は送付させていただきますので、ご連絡ください。

お問合せ先：医薬文献情報（国内）担当

TEL：03-5466-1821

E-mail：japic-q@japic.or.jp



❖ JAPICサービスの紹介 ❖

■ 医薬品情報ナビ

<医薬品情報ナビとは>

「医薬品情報ナビ」は国内外の添付文書、医薬品集、文献情報および医薬品情報に関係の深い機関のホームページ等が検索・参照できる総合医薬品情報提供ポータルです。

医薬品情報ナビへはJAPICホームページトップの「医薬品情報ナビ」ボタンまたはホームページトップ上部メニューバー右の「リンク集」をクリックしてアクセスします。

医薬品情報ナビには商品名五十音検索、会社名一覧、リンク集の3つのタブがあります。

<商品名五十音検索>

商品名五十音検索画面は国内の医療用医薬品の商品名（販売名）を五十音順に一覧表示します。タブの下に表示されている「ア行 カ行…」から任意の文字を選択すると、選択した文字で始まる商品一覧が表示されます。

特定の医薬品を検索する場合は、商品名または会社名のラジオボタンを選択し、検索欄に商品名または会社名を入力して検索を行います。

商品名	会社名/ホームページ	添付文書
アイピシリンD点眼液1%	アブラクロニジン塩酸塩	PDF表示
アイケアミ点眼液0.3%	精製ヒアルロン酸ナトリウム	PDF表示
アイケア点眼液0.1%	精製ヒアルロン酸ナトリウム	PDF表示

成分名をクリックすると、その成分名がiyakuSearchの医薬文献情報検索画面の検索用語として使用され、検索を行うことができます。

会社名をクリックすると、その会社のホームページへリンクします。

また、右端のPDF表示をクリックすると該当商品の添付文書が表示されます。

<会社名一覧>

五十音順に並んだ会社名のリンク集です。それぞれの会社ホームページにリンクしています。

<リンク集>

「海外添付文書情報」「海外医薬品集」「海外文献情報」「患者向け医薬品情報」「参考情報」等のカテゴリに分類したリンク集です。

全てのカテゴリとリンク先を表示した一覧画面と、リンク先の簡単な説明を示した各カテゴリごとのリンク集画面があります。

また、検索機能を備えており、カテゴリ単位で一括検索することができます。タグ下に表示されているカテゴリ名のチェックボックスにチェックを入れ、検索欄に検索用語を入力し、検索ボタンをクリックしてください。複数のカテゴリを選択することもできます。

この検索機能はGoogleに準拠しておりますので、一部検索できないサイトも存在します。この点につきあらかじめご了承ください。検索機能をご利用ください。

The image displays three overlapping screenshots of the JAPIC website. The top-left screenshot shows the main navigation menu with 'リンク集' (Link Collection) highlighted. The top-right screenshot shows the search interface with '海外添付文書情報' (Foreign Prescribing Information) selected in the category filter and 'Pravastatin' entered in the search box. The bottom screenshot shows the search results for 'Pravastatin', displaying a table of links to various international product information pages.

海外添付文書情報	Afssaps(France)	DailyMed(USA)	DECISIONARIO DE ESPECIALIDADES FARMACEUTICAS (Mexico)	Drugs@FDA(USA)	Electronic Medicines Compendium(UK)	European Public
<input type="checkbox"/> 海外添付文書情報 <input type="checkbox"/> 製薬会社ホームページ このリンク集検索の仕様はGoogleに準拠しておりますので、一部検索できないサイトが存在します。その点につき、あらかじめご了承ください。検索をお試ください。 また、リンク集から直接サイトにアクセスしていただき、サイトでの検索もあわせてご利用ください。	フランス医薬品規制当局(Afssaps)内の医薬品検索可能なサイト。製品名(Specialité)または成分名(substance active)で検索できます。 日本語で閲覧するサイト。検索結果は、最新の添付文書がHTML形式で製品画に表示されます。	アメリカの医薬品のSDPを製品単位で閲覧可能。会社名、製品名、成分名、ATCコード、薬効分類のアルファベット順の製品画を閲覧可能。	2011年15日版。L'étude "Long-Term Intervention with Pravastatin in Ischemic Disease (LIPID)" est un essai multicentrique, randomisé, en double aveugle, contrôlé contre placebo, comparant l'effet de la pravastatine (40 mg/jour) à celui d'un ... afssaps-prd.afssaps.fr	米国の医薬品の単品情報、添付文書等を参照することができます。	英国の医薬品Medicines Compendium(ABPI英国製薬協会のWebサイト)で添付文書(GPPO)の閲覧が可能。	European Public

最近の話題

血液製剤と血液法

一般社団法人 日本血液製剤協会 理事長
宮本 誠二 (Miyamoto Seiji)

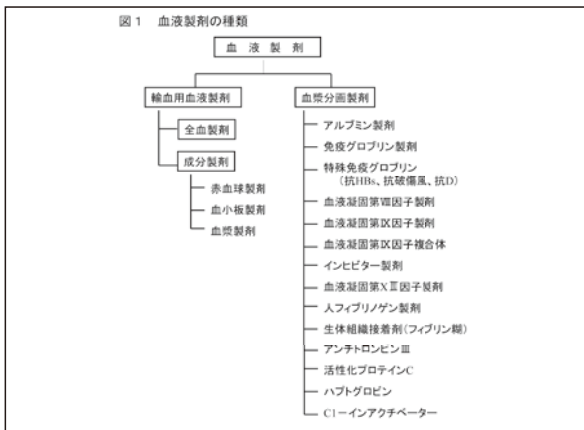


私たちが生きていく上で血液は必要不可欠のものであり、体重のおよそ13分の1（約8%）の量の血液が私たちの体内を流れています。血液は、赤血球、白血球、血小板といった有形成分と、液体成分である血漿からなっています。そして、その血漿の中には100種類以上の蛋白成分が含まれており、各成分はそれぞれに生体の維持のために重要な役割を担っています。

血液製剤は、このような「人の血液」をもとにして作られたものであり、血液製剤の供給は貴重で有限な血液の量に依存します。したがって、安定供給に対する十分な考慮が必要であり、血液の有効な利用と適正な使用が重要となります。また、血液を介して感染するウイルス等の感染因子に対する安全対策が重要であり、その安全性確保のためのさまざまな対応が取られています。

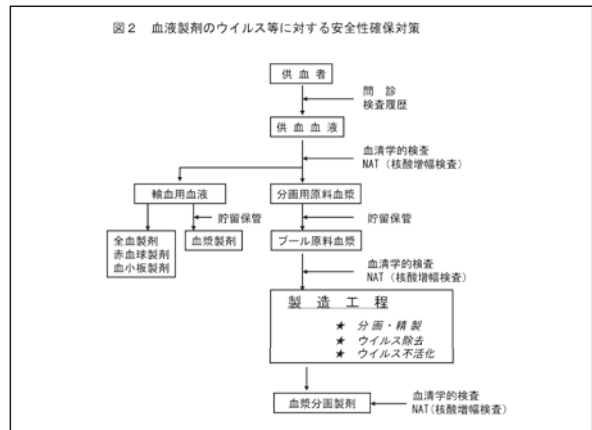
【血液製剤の分類】

血液製剤は、輸血用血液製剤と血漿分画製剤に区分されます。輸血用血液製剤には、血液そのものである全血製剤や、赤血球、血小板、血漿の各成分に分離した血液成分製剤があり、日本赤十字社が製造・供給をしています。血漿分画製剤は、血漿中に存在する有用な蛋白成分を精製して取り出したもので、アルブミン製剤、免疫グロブリン製剤、血液凝固因子製剤などがあります（図1）。アルブミン製剤は熱傷やショック、肝疾患等の際に、免疫グロブリン製剤は重症感染症や川崎病等に、血液凝固因子製剤は血友病患者の治療等のために使用され、その製造や供給は民間の製薬企業が行っています。



輸血という言葉は一般の方々でも耳にする機会はあると思いますが、血漿分画製剤というのはあまりなじみがないかもしれません。

血漿から種々の製法により有用な成分を分離精製して製剤化した血漿分画製剤は、貴重な血液を幾通りにも有効に活用して、それぞれに対応した疾病の治療に役立てることができます。また、原料となる血漿を介して感染するウイルス等の感染因子に対する安全対策として、採血時に行う問診やスクリーニング検査に加えて、血漿分画製剤においては、さらに原料血漿のウイルス検査、製造工程でのウイルス不活化・除去処理、最終製品でのウイルス検査といった一連の総合的な安全対策を実施して安全性を確保しています（図2）。採血時に行われる高感度のスクリーニング検査でも検出できないような微量のウイルスさえも製造工程中のウイルス不活化・除去処理で排除することができる血漿分画製剤は、輸血用血液製剤に比べて著しく安全性が高く、現在日本で使用されている血漿分画製剤では因果関係が確認されたウイルス感染の事例報告はありません。



【血液事業と血液法】

昭和31年に採血業の規制や供血者の保護を目的として制定された「採血及び供給あっせん業取締法」（採血法）が平成14年に大幅に改正されて、その目的を血液製剤の安全性の向上や安定供給の確保等に拡大した「安全な血液製剤の安定供給の確保等に関する法律」（血液法）として平成15年より施行されました。血液法では、血液事業の運営指針となる基本理念を設定し（法第3

条)、血液事業に携わる関係者の責務を明確化しています(法第4条～第8条)。基本理念には、①安全性の向上、②国内自給の原則と安定供給の確保、③適正使用の推進、④公正の確保と透明性の向上が掲げられています。そして、血液法の基本理念に基づき血液事業の方向性を示すものとして、「血液製剤の安全性の向上及び安定供給の確保を図るための基本的な方針」(基本方針)を定めています。

血液法では、血液製剤の国内自給とともに安定供給が基本理念とされ、これを受けた基本方針では、「国内の献血によって得られた血液が有効に利用され、血液製剤として安定的に供給される必要」があり、このため、国が需給動向を適切に把握する必要がある血漿分画製剤については需給計画を策定することとしています。需給計画とは、血漿分画製剤に関する翌年度の製造・供給見込みや原料血漿の配分等に関する事項について、薬事・食品衛生審議会の審議を踏まえ、毎年度、厚生労働大臣が作成するものです(法第25条)。製造販売業者等は、需給計画を尊重して製造・供給することとされ、製剤の供給量や在庫量を報告して安定供給を図っています。国内献血由来の原料血漿は、採血業者である日本赤十字社が、国が定めた価格に基づき国内の製造販売業者に配分します。

また、血液法は血液製剤の安全性の向上を基本理念に掲げており、血液製剤は薬事法に基づく特定生物由来製品に指定され、ウイルス等に対する安全対策や感染症定期報告、製造記録の30年保管など、他の医薬品よりも厳しい規制への対応が求められています。

こうした血漿分画製剤に課せられた特有の対応は、原料血漿の受入れから血漿分画製剤の製造・供給に至るまでのコストを押し上げる要因ともなっていますが、血液法の基本理念である、安全性の向上、安定供給の確保、適正使用の推進、透明性・公平性の確保に寄与してきました。

【国内自給】

血液製剤は有限で貴重な「人の血液」を使用していることから、国民の善意の献血に基づく「国内自給」を推進することは重要です。昭和50年にWHOは「無償献血を基本として各国の血液事業を推進すべき」という勧告を出しました。

日本では、輸血用血液製剤は昭和49年以降、全て国内の献血で賄われており国内自給を達成していますが、血漿分画製剤については、国内献血由来の製剤に加えて、海外からの輸入製剤にも依存している状況です。

こうした状況を踏まえて、血液法では基本理念に「国

内自給の原則と安定供給の確保」が掲げられ、それを受けて基本方針では、「倫理性、国際的公平性等の観点に立脚し、国内で使用される血液製剤が、原則として国内で行われる献血により得られた血液を原料として製造され、海外の血液に依存しなくて済む体制を構築すべきである。」としています。

免疫グロブリン製剤の国内自給率は向上し、平成19年度以降は95%程度で推移しています。アルブミン製剤は、適正使用の推進により総供給量は減少してきましたが、国内自給率は年々増加してきて平成19年度には63%となりました。しかし、平成20年度になると国内自給率が低下し、それ以降は自給率が60%前後で停滞しています。血液凝固第Ⅷ因子製剤には血液由来製剤と遺伝子組換え製剤があり、血液由来製剤は平成6年以降すべてが国内献血血漿から製造されていますが、遺伝子組換え製剤を含めた総量では自給率は低下しており、平成24年度では約17%です。

前述の基本方針は5年ごとに見直されることとなっていますが、平成25年に改正された基本方針では、「アルブミン製剤及び免疫グロブリン製剤等の血液製剤についても、平成30年を目途に国内自給の達成を目指すものとする」とされています。そして、「国内自給を推進するために、国内の需要を満たすために必要な献血量の確保、原料血漿の有効利用、献血由来原料血漿を使用した生産の拡大、医療関係者に対する献血由来製剤の意義の啓発、患者への情報提供、血液製剤の適正使用の推進等の方策を各関係者が実践して取り組むことが必要である。」と書かれています。

以上述べてきましたように、血漿分画製剤は多くの面で他の医薬品とは異なる特殊性があり、医療制度との関係、流通のあり方、コスト構造の問題など、検討すべき課題は山積しています。その血漿分画製剤の特殊性を広く国民の皆様にご理解いただくとともに、血液事業に携わる関係者の一層の努力と連携により、日本の血液事業を推進していくことが重要であると考えます。

薬剤師の現場

奈良フェニックス大学の 教壇に立って

一般社団法人奈良県薬剤師会 理事
新居 徹 (Nii Toru)



奈良フェニックス大学について

奈良フェニックス大学とは、いわゆる「団塊の世代」が第一線を退き今後ますます進む高齢化社会に際して、県民・県行政関係者・学界が協力してこの盛年世代にさらなる社会貢献の機会を設けるべく開かれた「学び舎」です。

盛年世代がこれからのライフスタイルを学び、仲間づくりを行うとともに、地域社会の将来のための活動を行うにあたっての知識やノウハウを提供するために開設されました。

シニア世代の一人ひとりがこれまでに培ってきた知識・ノウハウ・人的ネットワークなどは無尽蔵ですし、また人生80年時代と言われる昨今、これからの人生における吸収力も無尽蔵であると思われまます。

このエネルギーを奈良県内の活力醸成や地域貢献に活かすために、また、その優れた知識・ノウハウ・経験・人材ネットワークをもって、新たな時代に即した地域づくりを先導・プランニング・コーディネート出来る人材の育成のために2013年に開設されました。

満55歳以上で意欲があるなら誰でも入学可能で、受講料は年額50,000円です。

修業年限は、教養学部・地域リーダーカレッジ(2014年度より開講。詳細は後述。)とともに原則1年間で、各科目の講義1回の出席をもって1単位とみなし、30単位以上を修めると卒業となります。

大学の構成は教養学部と特別講座からなり、教養学部は、「人生80年時代を楽しく、有意義に生きる」・「健康長寿を実現する」・「奈良の魅力一知れば知るほどにおもしろい奈良を知る」・「次世代に引き継ぐ地域を創る」等をテーマに行う必修科目と「知っておきたい行政策」・「歴史の中の女性&万葉集に見る古代人の想い」等の選択科目からなる講義科目と、遺跡巡り・バトミントン・隠れた名所めぐり・野鳥観察等のクラブ活動なるものまであり、その活動範囲は個々人の楽しみと仲間づくりのみならず、地域社会の課題解決への取り組みにも及んでいます。

また幅広く受講者を募るために、一般からも年齢に関係なく受講可能な特別講座では、縄文期から奈良時代に

至る古代の奈良についての講義が好評を得ています。

種々多様なイベントの中、意欲的かつエネルギッシュに盛年の男女がまさにキャンパスライフを謳歌されています。

2014年度からは、「学び」と「活動」のエネルギーがさらに高まり、地域社会への働きかけが常態化することを願いつつ、教養学部の過程を再編し、クラブ活動の時間が十分とれるように配慮され、教養学部修了者が進学する地域リーダーカレッジも開設します。

この大学における履修は、仲間を拡大し既存のNPO・ボランティア団体への参加やソーシャルビジネスの立ち上げなどを旨とする「地域づくり活動への参加」、旅行ルート開発・歴史探訪・野鳥観察・食べ歩きマップの作成などの「同好の仲間とのクラブ活動」、「地域リーダーカレッジへの進学そして地域プランナー・コーディネータとしての活躍」など健康人生80年時代における次のステップへの多様な選択肢を獲得することに繋がることを目標としています。



奈良フェニックス大学_風景

薬剤師として教壇に立って

私の所属する奈良県薬剤師会では、地域活動の一環として、学校薬剤師部会を通しての育薬教育・地区薬剤師会による地域健康祭りへの参加などで禁煙啓発や薬物乱用防止活動などを高齢者も対象に行ってきました。

また、市民講座や県からの依頼による高齢者向けの服薬指導講習なども開催してきました。

今回は行政機関の県業務課経由で講師依頼があり、教養学部における必修科目の中の「健康長寿を実現する」というテーマのもと、薬剤師として『適切な薬との付き合い方』という演題で1時間半の講義を担当させていただきました。

講義の初めに、薬という字に係るクイズや薬のよもやま話をきっかけに薬の発見と歴史を紹介しました。

続いて本題に入り、健康の三原則（適度な運動・栄養バランス・十分な睡眠）とセルフメディケーションとして「自分の健康は自分で守る」ことに触れました。安全な薬の服用方法と相互作用、最近よく耳にするであろうジェネリック医薬品についても、アニメーション等で親しみやすい図解を心がけ好評を得ました。

最後に、「かかりつけ薬局」と「お薬手帳」の必要性についての説明という内容で締めくくりました。

講義全般を通しての感想ですが、若年層に比べると薬を身近に感じておられる方が多い(?) せいか個々の用語に対する認知度もかなり高く、特にジェネリック医薬品の使用については具体的な内容の受け答えをすることができ、参加者の時勢にあった知識吸収が感じられました。

また聞きなれない言葉に対しても、高い学習意欲と豊富な知識量のおかげで、少しかみくだいて説明するだけで理解を得ることができました。

他の分野の講師の方々も講演後の感想として異口同音に仰っておられるようですが、私自身もいくつになってもやる気と根気さえあれば、人間はまさに無尽蔵に成長できるものであることを実感させていただきました。

受講生の皆様のご好評につき来年度も講演依頼を受けており、県薬剤師会としてその期待に応えられるように講義内容と講演方法をさらに検討していきたいと思っております。

薬剤師としての地域活動への関わり方とは

来年度に関しても今年度同様、教養学部における必修科目の中の「健康長寿を実現する」というテーマのもと、薬剤師として『適切な薬との付き合い方』を薬剤師会として担当することになっています。

日本薬剤師会が2013年4月に薬局、病院・診療所、製薬、卸、学校等の各職域に従事する薬剤師の将来像と薬剤師の意識改革に向けた指標となる「薬剤師の将来ビジョン」を発表されていますし、昨今、医薬分業の意義や費用対効果に対し医療関係者だけでなく国民からも厳しい意見が寄せられ、薬剤師業務の「見える化」が叫ばれています。

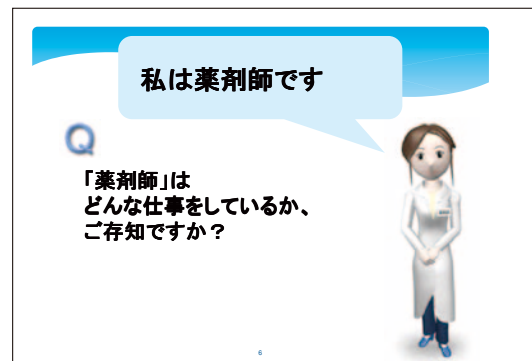
先日「薬と健康の週間」では、(1) 疑義照会、(2) お

薬手帳、(3) ジェネリック医薬品、(4) 残薬確認、(5) 一般用医薬品の5つの薬剤師業務についてスポットが当たりましたが、私たちは薬剤師として地域社会の様々な取り組みに積極的に参画していくことが、今後さらに重要に、そして必要になると思われます。

今回のような盛年世代へ関わる機会をきっかけに、様々な世代に対し適切で効果的なアドバイスや指導・指示を行えるような薬剤師であること、またそういう人材を増やしていくことが、我々の当面の急務であると思います。

その点を踏まえ、奈良県薬剤師会としてもこの活動をしっかり充実したものにしていきたいと考えております。

薬剤師の皆さん! 我々の職能発揮の責任も無尽蔵ですぞ!!

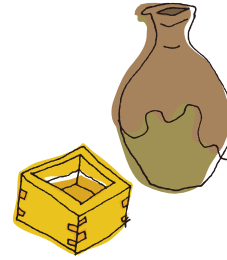


くすりの散歩道

NO.75

日本酒のEBM

(一財)日本医薬情報センター 図書館部門
平山 陽菜 (Hirayama Haruna)



このJAPIC Newsが皆様のお手元に届くころには、寒さも少しは和らいでいるでしょうか。早く暖かくなることに越したことはありませんが、冬には冬で良いところもありました。日本酒を嗜む方には特に同意していただけることと思います。

なんとといっても、冬の鍋料理や寒ぶり、白子にあん肝、旬の肴に併せた日本酒はたまりません。お店で十四代や而今といった珍しいお酒を愉しむのも良いですが、家で楽しむ晩酌も乙なものです。今シーズンの私の冷蔵庫を賑わしてくれたのは、鍋島、虎の尾、花邑、射美といった銘酒たちで、どのお酒もとっても美味しく素晴らしいものでした。

アルコールは飲み過ぎると健康を害してしましますが、適量を適度に摂取することは、逆に人体に良い影響を与えることもあります。私は薬剤師ではないので成分については詳しくありませんが、ライブラリアンとして文献を扱うことはできますので、EBMの精神に則ってご紹介しましょう。

最近、日本酒を用いたハンドクリームや入浴剤が販売されていることをご存知でしょうか。元々、日本酒をつくる杜氏の手が美しいことが経験的に知られており、日本酒には肌を綺麗にする成分がふくまれているのではないかと考えられていました。このことに着目し研究を進めた結果、日本酒の保湿効果や保温効果が実証されました(前田真治他. 日本温泉気候物理医学会雑誌. 2006, 69(3), p.179-186.)。美容だけでなく、清酒や酒粕には血圧降下作用を持つアンジオテンシン変換酵素阻害ペプチドや (Saito Y, et al. Bioscience, biotechnology, and biochemistry. 1994, 58 (10), p.1767-1771.)、抗腫瘍活性や健忘症の予防の作用を持つ成分など、様々な生理活性物質を含有しており(川戸章嗣. 日本醸造協会誌. 2005, 100 (3), p.148-157.)、その解析が進められています。

また、国立がん研究センターによる多目的コホート研究では、お酒を全く飲まない人よりも、少量の飲酒(アルコール換算で週に150g未満)を行う人

の総死亡リスクが最も少ないことが明らかになりました(Tsugane S, et al. American journal of epidemiology. 1999, 150 (11), p.1201-1207.)。死亡リスクだけでなく、がんや虚血性心疾患、自殺、脳梗塞、2型糖尿病などの疾患別のコホート研究においても、全くお酒を飲まない人より時々飲む人のリスクが低くなる「J字型」現象がみられます。このことから、生活習慣病の予防を目的に国民健康づくり運動として行われた「健康日本21」でも、節度ある適量の飲酒(アルコール換算1日平均20g)が推奨されました。ちなみに、アルコール20gは、アルコール度数15%の日本酒で1合(180ml)程度にあたります。

しかし、全ての疾患において多量飲酒によるリスク増加は明らかであり、お酒を飲みすぎることには良いことはありません。また、高脂血症や脳出血など一部の疾患では飲酒によるリスク低減は認められません。例えば、痛風の原因となる高尿酸血症の非飲酒者の有病率を1とした場合、アルコール換算した1日の飲酒量が25g未満で1.6、25g以上50g未満で2.6、50g以上で3.0と、お酒をのめば飲むほど有病率が高くなる結果が判明しました(Takuya Sugie, et al. Journal of Epidemiology. 15 (2), 2005, p.41-47.)。ちなみに、ビールを飲むと痛風になりやすいと言われますが、有病率にアルコールの種類による有意差はありませんでした。もちろんプリン体の含有量はビールが最も多く、ウイスキーなどの蒸留酒にはほとんど含まれないのですが、アルコール摂取により体内で尿酸が生成されやすくなることや、お酒のおつまみになりやすい食材にプリン体が多く含まれることの影響が考えられます。痛風の予防のためには、ビールやアルコールを摂取しなければ良いというだけでなく、食生活や運動習慣などを総合的に考える必要があるでしょう。

日本酒は日本の伝統的文化の1つであり、とても魅力的な嗜好品ですが、一方で飲酒によって他人に迷惑をかけたたり、人体を害する人がいることも事実です。お酒は飲んで飲まれるな。用法用量を守って、正しくお酒を嗜みましょう。

3月発刊! 『JAPIC医療用医薬品集 普及新版2014』

毎年大好評の『JAPIC医療用医薬品集 普及新版2014』を3月中旬に発刊いたします。

本書はコンパクトなA5判で2014年1月までの添付文書情報を収載しておりますので、毎年8月発刊の医療用医薬品集のハンディ版あるいは追補版としてもご活用頂けます。

《本書の特長》

- ・「JAPIC医療用医薬品集」収載内容から臨床で利用する頻度の高い〔組成、効能・効果、用法・用量、禁忌、警告、使用上の注意（相互作用、副作用、妊娠授乳婦投与、高齢者投与、小児投与等）、半減期〕を抽出、要点に絞って編集し、一回り小さいA5判のハンディサイズにまとめました。
- ・2014年1月時点までの約2,100成分、約20,000製品の最新医療用医薬品情報を収録しております。
- ・医療用医薬品集に比べページ数は約半分となり、価格もお求めやすくなっております。

価格：4,800円（+税）。A5判 約1,700ページ（販売：丸善出版株式会社）



『日本の医薬品 構造式集2014』

『日本の医薬品 構造式集 2014』を2月下旬に発刊しました。

化学構造式にはきわめて多くの関連情報が含まれており、それらの情報から医薬品の代謝や薬理作用などを類推することができ有益です。最新の構造式を収録した書籍は他に見られないことから貴重な資料となっております。

《本書の特長》

- ・「JAPIC医療用医薬品集2014」収載成分から一部の高分子製剤、低分子製剤などを除く約1,400成分の構造式を収録しております。
- ・各成分には構造式のほか、一般名・化学名・薬効分類・効能効果・CAS Registry number・分子量・分子式を記載しております。
- ・索引は五十音（和文）索引とアルファベット索引の2種類を収録。五十音索引では製品名による検索ができます。
- ・お求めやすい価格に改定しました。

価格：1,800円（+税）。B5判 約200ページ（販売：丸善出版株式会社）



外国政府等の医薬品・医療機器等の 安全性に関する規制措置情報より – (抜粋)

2014年1月6日～1月31日分のJAPIC WEEKLY NEWS (No.435-438)の記事から抜粋

■米FDA

- OTCのSodium Phosphate製品に関するDrug Safety Communication：推奨用量を超えた使用による腎臓や心臓への危害の可能性について

<<http://www.fda.gov/Safety/MedWatch/SafetyInformation/SafetyAlertsforHumanMedicalProducts/ucm380833.htm>>

- 325mgを超えるacetaminophen合剤に関する米FDAの声明：処方および調剤中止の勧告；肝障害リスクなどについて

<<http://www.fda.gov/Safety/MedWatch/SafetyInformation/SafetyAlertsforHumanMedicalProducts/ucm381650.htm>>

■Health Canada

- Revlimid (lenalidomide)：肝障害のリスク；製品モノグラフの警告および使用上の注意の改訂など

<<http://healthycanadians.gc.ca/recall-alert-rappel-avis/hc-sc/2013/37383a-eng.php>>

- Sublinx (zolpidem tartrate)：男性および女性における翌日の注意力低下リスクを最小化するための新用量に関する勧告

<<http://healthycanadians.gc.ca/recall-alert-rappel-avis/hc-sc/2014/37415a-eng.php>>

- ARZERRA (ofatumumab)：B型肝炎ウイルスの再活性化に対するスクリーニング、モニタリング、管理について

<<http://healthycanadians.gc.ca/recall-alert-rappel-avis/hc-sc/2014/37705a-eng.php>>

■独BfArM

- dihydroergotamine含有医薬品のRote-Hand-Brief：使用制限について；ベネフィットが線維症や麦角中毒のリスクを上回らないことから片頭痛の予防、起立性低血圧などを適応として今後は処方しないことなど

<<http://www.bfarm.de/SharedDocs/Risikoinformationen/DE/RHB/2014/rhb-dihydroergotamin.html?nn=3494892>>

■仏ANSM

- Erbitux (cetuximab)：野生型のRAS遺伝子の変異ステータス（特にKRASおよびNRAS遺伝子のエクソン2、3および4）を特定することの重要性について；医療専門家向けレター

<<http://www.anism.sante.fr/content/download/57491/738525/version/1/file/ddl-140106-Erbitux.pdf>>

- buprenorphine製剤の提供および適正使用に関する重要な情報について；医療専門家向けレター；ANSMが2011年10月に発表した勧告事項を再度注意喚起

<http://www.anism.sante.fr/content/download/58327/748361/version/1/file/DHOC_140129-Buprenorphine.pdf>

JAPIC事業部門 医薬文献情報（海外）担当

記事詳細およびその他の記事については、JAPIC Daily Mail（有料）もしくはJAPIC WEEKLY NEWS（無料）のサービスをご利用ください（JAPICホームページのサービス紹介：<<http://www.japic.or.jp/service/>> 参照）。JAPIC WEEKLY NEWSサービス提供を御希望の医療機関・大学の方は、事務局業務・渉外担当（TEL 0120-181-276）までご連絡ください。

【新着資料案内 平成26年1月1日～平成26年1月31日受け入れ】

図書館で受け入れた書籍をご紹介します。この情報は附属図書館の蔵書検索 (<http://www.libblabo.jp/japic/home32.stm>) の図書新着案内でもご覧頂けます。これらの書籍をご購入される場合は、直接出版社へお問い合わせください。閲覧をご希望の場合は、JAPIC附属図書館 (TEL 03-5466-1827) までお越し下さい。

〈配列は書名のアルファベット順、五十音順〉

書名	著編者	出版者	出版年月
MIMS Annual Myanmar 17th ed. 2013/2014	Ng Hui Ping, et al.	UBM Medica Asia Pte Ltd	2014年
MIMS Annual Philippines 25th ed. 2013/2014	Leong Wai Fun, et al. ed.	UBM Medica Asia Pte Ltd	2013年
ViDAL Vietnam 2013/2014	Leong Wai Fun, et al. ed.	UBM Medica Asia Pte Ltd	2013年
JAPIC 漢方医薬品集 2014	日本医薬情報センター 編	日本医薬情報センター	2014年1月
MeSH入門	シソーラス研究会	情報科学技術協会	2013年12月
医薬品添加物規格 2013	薬事日報社	薬事日報社	2013年11月
今日の治療指針 2014年版 (Volume 56)	山口 徹、他 編	医学書院	2014年1月
歯周病患者における再生治療のガイドライン 2012	日本歯周病学会 編	日本歯周病学会	2013年12月
図解PubMedの使い方: インターネットで医学文献を探す 第6版	岩下 愛、山下 ユミ	日本医学図書館協会	2013年11月
成分から調べる医薬品副作用報告一覧: 2004年4月から2013年6月までの累積データ	日本医薬情報センター 編	日本医薬情報センター	2014年1月
日本病院薬剤師会会員名簿 2014	日本病院薬剤師会 監修	薬事新報社	2013年11月
やってみよう図書館での医療・健康情報サービス 改訂版	日本医学図書館協会医療・健康情報ワーキンググループ	日本医学図書館協会	2013年10月



情報提供一覧

【平成26年2月1日～2月28日提供】

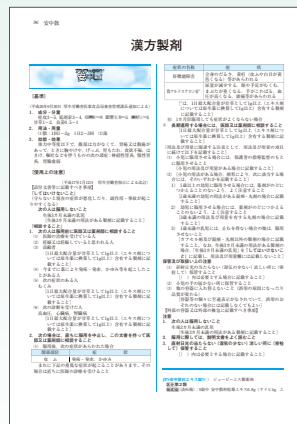
出版物がお手許に届いていない場合、宛先変更の場合は当センター事務局 業務・渉外担当 (TEL 03-5466-1812) までお知らせ下さい。

情報提供一覧	発行日等	JAPIC作成の医薬品情報データベース	更新日
〈出版物・CD-ROM等〉		〈iyakuSearch〉 Free	http://database.japic.or.jp/
1. [JAPIC Pharma Report—海外医薬情報]	2月7日	1. 医薬文献情報	月 1 回
2. [添付文書入手一覧] 2014年1月分 (HP定期更新情報掲載)	2月3日	2. 学会演題情報	月 1 回
3. [JAPIC NEWS] No.359 3月号	2月28日	3. 医療用医薬品添付文書情報	毎 週
4. [日本の医薬品構造集2014]	2月21日	4. 一般用医薬品添付文書情報	月 1 回
〈医薬品安全性情報・感染症情報・速報サービス等〉 (FAX、郵送、電子メール等で提供)		5. 臨床試験情報	随 時
1. [JAPIC Pharma Report海外医薬情報速報] No.918—921 (旧: 医薬関連情報速報FAXサービス)	毎 週	6. 日本の新薬	随 時
2. [医薬文献・学会情報速報サービス (JAPIC-Qサービス)]	毎 週	7. 学会開催情報	月 2 回
3. [JAPIC-Q Plusサービス]	毎月第一水曜日	8. 医薬品類似名称検索	随 時
4. [外国政府等の医薬品・医療機器の安全性に関する措置情報サービス (JAPIC Daily Mail)] No.3094—3112	毎 日	9. 効能効果の対応標準病名	月 1 回
5. [JAPIC Weekly News] No.438—441	毎週木曜日	〈iyakuSearchPlus〉 http://database.japic.or.jp/nw/index	
6. [Regulations View Web版] No.280—281	2月14日・28日	1. 医薬文献情報プラス	月 1 回
7. [感染症情報 (JAPIC Daily Mail Plus)] No.528—531	毎週月曜日	2. 学会演題情報プラス	月 1 回
8. [PubMed代行検索サービス]	毎月第一・三水曜日	3. JAPIC Daily Mail DB	毎 日
9. [JAPIC医療用医薬品集2014] 更新情報2014年2月版	2月28日	4. Regulations View DB (要:ID/PW)	月 2 回
		外部機関から提供しているJAPICデータベース	
		〈JIP e-infoStreamから提供〉 https://e-infostream.com/	
		〈株式会社ジー・サーチJDreamⅢから提供〉 http://jdream3.com	

国内流通の医療用漢方製剤、一般用漢方製剤の添付文書情報を網羅しました



本書は、国内流通の医療用漢方製剤、一般用漢方製剤の添付文書情報を網羅し、医療用漢方製剤に対応する標準病名の一覧（効能効果対応標準病名一覧）の収録に加え、2014版では医療用漢方製剤の製品番号索引を新たに収録しました。漢方製剤の適正使用やレセプトチェックにご利用ください。



収録内容

- ◎医療用漢方製剤
- ◎一般用漢方製剤
- ◎効能効果対応標準病名一覧

価格：2,800円(+税)

B5判/約800頁

一般財団法人 日本医薬情報センター JAPIC 編集・発行 TEL 0120-181-276
丸善出版株式会社 発売 TEL 03-3512-3256

上記書籍の他、電子カルテやオーダーリングシステムに搭載可能なJAPIC添付文書関連データベース(添付文書データ及び病名データ)の販売も行っております。データの購入希望もしくはお問い合わせはJAPIC (TEL 0120-181-276) まで。

Garden

このコーナーは薬用植物や身近な植物についてのヒトクチメモです。リフレッシュにどうぞ!!

ねこやなぎ

別名:エノコロヤナギ、カワヤナギ、学名:Salix gracilistyla、英名:Chinese pussy willow。ヤナギ科ヤナギ属。日本各地の川辺に自生。落葉低木。早春の頃、銀白色の柔らかい毛で包まれた花穂がかわいらしくネコの尾のようだ。雌雄異株で、3~4月には花が付く。雄花の花粉袋は赤色。枝や根に鎮

● 痛作用を有するサリシン(サリチル酸配糖体)が含有されている。(hy) ●



JAPICホームページより
<http://www.japic.or.jp/>

HOME

サービスの紹介

ガーデン

Topページ右下部の「アイコン」からも閲覧できます。